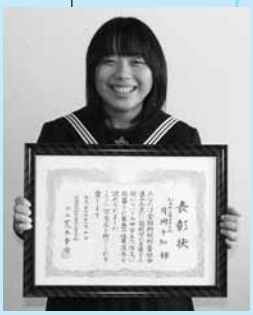
平成22年度中学生の「税についての作文」優秀作品紹介

熊本県納税貯蓄組合連合会会長賞

第二の貯金

菊水中学校　三年　片岡　千知



私にとって税とは
一、私達はまだ払わなくていい。
二、でも消費税は別。
三、一〇〇円アイスに五円追加される。

この程度のものだった。実際、生まれた時から消費税は払っているので、まぁ一円玉減らせるしいいか、と思うくらいだったのである。

しかし、最近消費税の税率引き上げが騒がれ、中学生である私でも税に関心を持つようになった。そして考えた。今の日本国民は快く税を払っているだろうか、と。

不況と呼ばれるこの時代。全国の主婦達は一円でも安い食材を求め隣町まで歩き、サラリーマン達は昼食をワンコインで済ませる。そんな中での納税とはとても厳しい。だからこそ今の日本はその税金の行方に信頼性と安定を求めているのではないだろうか。

例えば、スウェーデンやデンマークの消費税は二十五パーセントあるのに関わらず、世界一幸せな国だと言われている。それは、教育や医療を無償で受けることができ、老後も年金だけで十分豊かな生活ができると保障されているからだ。教育にいたっては大学まで国が負担してくれ、羨ましい限りである。さらに一番お金のかかる日用品や食料品の税率は他のものよりも低くなっている。これらの理由によりスウェーデンやデンマークではいくら税金が高くても、みんな快くお金を国に〝預けて〟いるのだ。

それに比べ日本では国にお金を〝取られて〟いるという感覚があるのではないだろうか。そんな中での消費税の税率引き上げは、国民の反感を買うばかりでなく、不信感をも抱かせてしまう。だからと言ってこのまま何もしなければ、問題は何も解決できないと国は主張するが、それならばもっと税の行方を明確にはっきりと国民に伝えるべきだと私は思う。そして、国民がそれを十分に納得して、税を納めることこそに意味があると思うのだ。

そして、税を納める側にも理解が必要だと思う。目先のことだけ見れば、税率が上がると生活が圧迫され、いい思いをするものではない。しかし、もっと先を見れば自分の老後やこれから育つ子供の未来がより豊かなものになるのだ。預ければ違う形で返ってくる。あるいは、それ以上になって返ってくる。言わば、〝第二の貯金〟となるのだ。

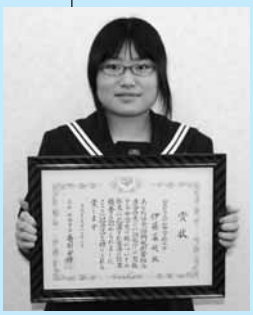
この〝第二の貯金〟に一番必要なのが〝信頼性〟と〝安定〟なのである。預ける側と預かる側がお互いに歩み寄り、税がもっと身近に感じることができれば、どちらとも今よりもっといい思いをすることができるのではないだろうか。そして、そこに生まれる〝信頼〟こそが幸せな国への第一歩になると私は思う。

例え、定価一〇〇円のアイスが一二〇円になったとしても、その二〇円で日本の未来が明るくなるのならば、何だか得した気分にならないだろうか。

玉名税務署長賞

税金の意味を知って

三加和中学校　三年　伊藤　菜純



ある日突然、私の近所のおばあちゃんがけがをした。仕事をしている途中、チェーンソーを足の上に落としてしまい、大けがをしてしまったのだ。

「誰か、救急車を呼んでくれ。」

おばあちゃんは、集まっていた子どもたちにそう言った。子どもたちは、びっくりしていてすぐに動くことができなかった。でも、別のおばちゃんがすぐに救急車を呼んでくれた。救急車はそれからすぐにおばあちゃんを病院に運んで行った。家では、その話題でもちきりだった。

「大丈夫かねぇ。」

みんなでおばあちゃんの事を心配していた。でも、それから数週間後、おばあちゃんは、足に包帯を巻いて帰ってきた。命に関わらず、みんな安心していた。

そんな出来事があったのは、小学校低学年のころだ。その時はまだ分からなかったが、高学年になった時、税について勉強し、あの時、救急車がきてくれたのは、税金というものがあったからだと分かった。それを知るまで私は、買い物をするときに払う消費税が嫌いだった。お小遣いは少ないのにそんなものを払う意味が分からなかったのだ。それと同時に、どうして救急車やパトカーは、電話しただけで来てくれるのかとも思っていた。大人はみんなお金をもらって働いているのに不思議だった。でも、それにまで税が関わっていると知ったときには、正直、びっくりした。

自分が嫌いだと思っていた税金が、人の役に立つものだと初めて分かったのだ。その時、初めて税金に感謝した。税金があったおかげで、近所のおばあちゃんは、助かったんだと思い知らされた。それから、税のことを勉強していくうちに、税がどれだけ人に関わっているのかも知った。今、私が学校に通えているのだって税のおかげだ。税があるから私は、学校に行き、勉強ができるのだ。世界には、学校に行けなくて辛い思いをしている人だっている。学校に行けることが、どれだけ幸せな事なのか分かった今、中学校最後の一年間を大切にし、勉強も頑張ろうと思えるようになった。来年からは、義務教育じゃなくなり、授業料も教科書代も払わなければいけない。それがどれだけ家族にとって大変なことなのか、それは、大人にならなければ分からないことかもしれない。けれど、その分、勉強を頑張ることはできる。自分の夢のためにかかったお金、かかるお金、それは、家族や国民が出してくれているのだ。だからその分、自分が大人になった時、他の子どもたちにも、幸せな生活を送ってもらえるよう、消費税や所得税、これから関わっていく税をちゃんと払っていきたい。そして、私たち国民の未来が明るいものとなってほしい。

11月13日（土）玉名市の白鷺荘別館で、中学生の「税についての作文」の表彰式が行われました。荒尾・玉名地域の中学校から2,461点の応募があり、和水町からは５点の作品が入賞。また、学校表彰として三加和中学校が受賞されました。広報なごみでは、先月号に引き続き入賞作品を紹介します。

和水町長賞

税に感謝

三加和中学校　三年　**北原　麻美**

税金がなかったら、将来の私はどうなっていたのだろう。きっとすごく危険な状態なのだろう。

「手術っていつするんですか。」

中三の五月、突然手術をしようと言われた。

「今はまだ受験があるから、来年の夏休みに。」

私は、母親からの遺伝で股関節が悪い。医者の先生いわく、今手術すれば、将来は、全力で走ったりできるらしい。もしもそれが遅かったりしたら、人工股関節をいれなくてはならないらしい。金具をいれられるなんて、そう思うと鳥肌がたってくる。

ふと、私は思った。

お金は、いったいいくらかかるの？

病院の帰り道、車内では父と母で話をしていた。きっと手術のことだろう。足の病状手術までの学校生活など、中三の私でさえ理解するのに苦労する。

不思議なことにお金の話が出てこない。私は、母に尋ねてみた。

「お母さん、手術ってお金がかかるとじゃないと。手術費用ってどがんすると。」

娘には関係のないことだろうと言われると思っていたが母は優しく答えてくれた。

「税金があるから心配せんでいいとよ。」

税金。現代の人たちが納めるお金のこと。

手術と税、どこに関係があるのだろう。

「お母さんの時も費用の半分以上は税金で払われとるとばい。」

知らなかった。母親の足に入っている金具がまさか税金からできているなんて。つまり、人々の思いがあるんだと私は思った。

税金のない世界は、人々の生活から、なにもかも、悪い方に変わっていってるだろう。警察も公共のしせつも、私に関係のあるものすべてが、悪い方に変わる。税金は、私たちにかけがえのないものなんだ。

私は、今まで税金がなくなればいいのにと思っていた自分に腹がたってしまった。

税に文句を言う前に税に感謝しろと。

数日ぐらいたって、私は自転車をこぎながら考えた。

そういえば、私が学校に通えるのも、教科書がタダなのも、すべて税金のおかげ。私がこれからも自転車に乗れるのも、手術の費用の半分が税金で払ってあるからだ。

私たちには、まだ関係のないことだと思うのではなく、なぜ私たちには関係ないことなのかと私は思いたい。

今はまだ準備の段階、今まで以上に深く付き合う税について予習をしていくのだ。

手術をする日は、どんどん近づいていく。

私は、手術が終わっても、生きているうちは、税に感謝しつづけるだろう。

和水町教育長賞

かくれた税金に目を向けて

三加和中学校　三年　**小山　由佳**

「みなさんは、税金がどのように使われているか知っていますか？」

と租税教室で聞かれたことがある。私は今回で三回目の租税教室。税についてはだいたい知っているつもりだった。私は、大きなけがや病気で救急車ではこばれたこともなければ、火事になって消防車を呼んだこともない。そんな私に税なんて関係あるのだろうかとも思った。しかし、税とはお金から形を変えて私たちの生活の身近にたくさんかくれていた。例えば、私たちが毎日通っている中学校。その中にも税はたくさんかくれている。まず一番大きな税は、校舎。三階建ての大きな校舎も税金で建てられている。そして机やパソコンも税金から出されている。その他にも私たち一人一人が持っている教科書も税金からだった。このようにいろんな所にかくれている税金。しかしそれは学校の中だけではない。私たちの住む町にもたくさんの税がかくれているのだ。今回はその中から一つ道路について考えてみようと思う。私の住む町は、田舎で自然がたくさんある。だから私の毎日通う通学路も田んぼで囲まれている。そんな通学路には、とても危険な道があった。その道は、とてもせまく、自動車が一台やっと通る位だった。しかも道はガタガタでガードレールさえなかった。すぐとなりは田んぼ。一歩バランスをくずすと田んぼにポチャンだ。実際私も何度も落ちそうになったことがある。そんな通学路に対して私は、「なんでこがんボロいと。」といかりさえ覚えた。しかしそんなある日のこと、その道の幅を広くしてきれいにする工事がはじまった。工事中も道はガタガタではあったが、あのせまくてガタガタだった道が少しずつ広くそしてきれいになっていくのがとてもうれしかった。そして今はとてもきれいな道に生まれかわっている。私は思う。これは税金のおかげなのだと。普段なにげなくみんなが通っている道にもたくさんの税金がかくれているんだと。そして私はもし税金がなかったらどんな生活を送ることになるんだろうと考えてみた。学校に通うのにもお金がかかるし、道がボロボロでも工事なんて誰もしないのだろう。そう考えてみると税金は、わたしたちの生活になくてはならないものだと改めて思う。しかし税金は私たちの生活の身近にかくれていて私たちはそれがあってあたり前だと思っている。だから税金の大切さにも気づかないのだろう。だから私はこうみんなに伝えたい。「わたしたちの生活にたくさんかくれている税金に目を向けてみてはどうですか。」と。